

# 名城大学 経済・経営学会会報

No.73

『名城論叢』  
第十九巻 第一号 付録  
二〇一八年七月二〇日  
名城大学 経済・経営学会 発行

『戦場にかける橋』、タイムン(泰緬) 鉄道、あるオーストラリア人捕虜  
……………鈴木英夫  
一般会計収支計算書  
……………  
学外研究発表記録  
……………

i 19 1

## 『戦場にかける橋』、タイムン(泰緬) 鉄道、あるオーストラリア人捕虜

鈴木英夫

### 一、映画『戦場にかける橋』とクワイ河マーチ

英米共同制作映画『戦場にかける橋』の初上映は一九五七年である。六〇年以上の昔ということになる。アメリカのコロンビア映画社作成で、その年のアカデミー賞を総なめにした名作品だった。原作はフランス人作家ピエール・ブールの『クワイ河に架かる橋』。映画の監督はイギリスのデービッド・リーン(リーンは他にも『アラビアのロレンス』や『ドクトル・ジバゴ』など往年の名作映画の監督でもある)、『戦場にかける橋』には英米の俳優が出演し、日本人俳優では早川雪洲が主役級の

重要な敵役を演じた。六〇年以上も前の映画となると、これを映画館で見たことがあるのは、現在六〇歳代以上の人々ということになるだろう。私は現在七〇歳だが、栃木県の田舎町の高校生どころ、古い映画館でこれを見た。今ではDVD パージョンがあるので、私よりずっと若い人々の中にも、自宅での映画を見たことのある人はいるかもしれない。しかし映画を見たことの有る無しに関わらず、映画の中で流れるテーマミュージック『クワイ河マーチ』は、ほとんどの人たちが聴いたことがあるのではなからうか。私は遠い昔、中学生だった一九六〇年代前半、運動会でこの行進曲に合わせて何度も行進させられた(あまり楽しくない)記憶がある。つい最近、名古屋城近くの名城公園で、近隣中学校のブラスバンドが『クワイ河マーチ』の演奏練習をしていたが、久しぶりに懐かしいメロディーを聴かせてもらった。今でも演奏されているところを見ると、あの行進曲は寿命が長いようだ。(同僚で四〇歳代のS教授は子供の頃、あのメロディーに合わせて、サル、ゴリラ、チンパンジー、サル、ゴリラ……と繰り返す替え歌を歌った記憶があるそうだ。)

太平洋戦争が戦われたのは一九四一年二月〜四五年八月の

四五カ月。そのほとんどの期間、日本軍は東南アジアに広く兵力を展開した。四五カ月間に、アジア各地で実に様々な現実のドラマ、事件が繰り広げられた。もちろんそれらのドラマは、日本の中でいろいろと異なる立場の、実に多数の人々によって、膨大な量の文献、映像として記録されてきている。同時に、関係各国の公的機関や個人たちも、日本とはまた別の視点、観点から同じドラマを記録し、解釈してきた。フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア、タイ、ビルマ、ベトナム、そしてもちろんアメリカ、イギリス、オランダ、中国の個人政府機関、歴史家たち。

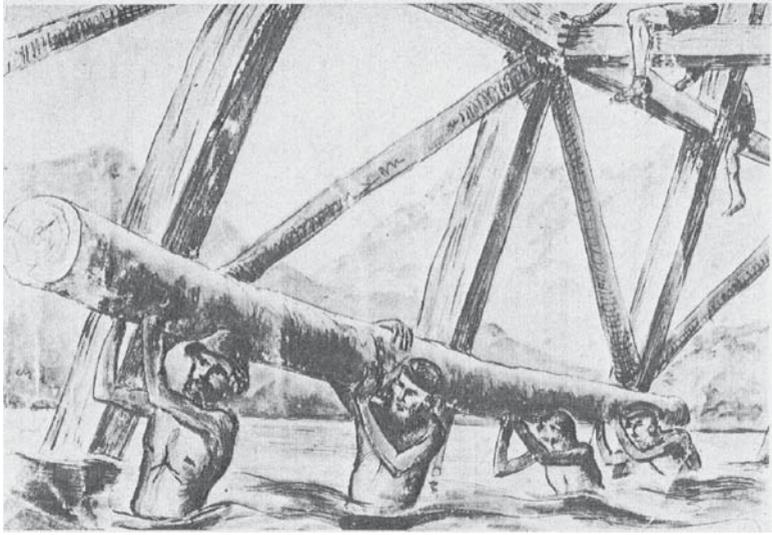
これら現実の、本物のドラマの一つに、タイメン（＝泰緬、タイ・ビルマ）鉄道の建設がある。タイのバンボン（Bangbon）からビルマのタンビザヤット（Thanbyazayat）を結ぶ四一五キロの鉄道。一九四二年半ばに建設が開始され、翌四三年一〇月に完成した。後に述べるような理由によって、タイメン鉄道は連合国側から「死の鉄道（Death Railway）」と呼ばれた。この鉄道建設には、四二年当時東南アジアにおいて日本軍に捕えられたイギリス、オーストラリア、オランダ、アメリカなどの兵士（および少数の民間人）捕虜六万人強の強制労働、および東南アジア各地から募集に応じ、あるいは強制的に連れてこられたアジア人ロームシャ二〇数万人、日本人一万余千人の労働が投入された。

タイ・ビルマのジャングル地帯で行われた苛酷な建設労働は数万といわれる犠牲者を出した。（オーストラリアの公機関である戦争記念館は、連合軍兵士捕虜の犠牲者数を一万一千人、

そのうちオーストラリア人二八一五人、アジア人労務者は約七万五千人と公表している。しかし捕虜だった英連邦軍軍医の推測、「アジア人ロームシャを加えれば、犠牲は二〇万を超すだろう」というのもある。正確な犠牲者数は不明。少なくとも一九八〇年代まで、この旧鉄道沿いのジャングルや農地を農民たちが掘り起こした時、多数の人骨が発見されることがあったという。）

『戦場にかける橋』とは、この時の鉄道建設をめぐるストーリーであり、特にタイ側のカンチャナブリという町の近くを流れる河にかけて鉄橋建設を題材にしたフランス小説を映画にしたものである。河の名前はクワイ河。戦前には別の名前があったそうだが、映画『戦場にかける橋』が世界的に有名になり、戦後に河の名前をクワイ河に変更したのだそうだ。いずれにせよ、スタリーンに展開されるストーリー、映像、音響は、巨大な迫力で観る人の心に迫る。日本軍の監視強制のもと、イギリス兵、アメリカ兵などが架橋作業に投入され、苦役、虐待、拷問、処刑、脱走、そして工事の完成と橋の爆破……最後に主人公のイギリス高級将校の死……。

実はこの拙文の目的は、映画の詳細を説明することではない。映画ではなく、現実には戦争捕虜としてタイメン鉄道建設に従事させられた一人のオーストラリア人ジャーナリスト、ローハン・リベットという人物の体験を述べるのが目的である。彼は三年以上にわたり日本軍の捕虜として極度の苦痛を味わった。彼は終戦とともに解放され、ついにオーストラリアに生還する。戦後ジャーナリストとして復帰した彼は、その三年以上の捕虜体



(英兵捕虜で画家のレオ・ローリングズが描いたクワイ河架橋工事)

験を『Behind Bamboo』(ペンギン社出版)という本にまとめた。この拙文は、主にリベットの著書を参考にした。イギリス人捕虜で画家だったレオ・ローリングズの著書『クワイ河捕虜収容所』、日本兵として現地で捕虜と接した永瀬隆の著書『戦場にかける橋のウソと真実』、その他も参考にした。

もちろん私は元捕虜ローハン・リベット氏にあったことは無い。しかし不思議な巡りあわせでこの人物のことをかなり良く知ることになった。その巡り合わせのことについては最後に触れることにする。

## 二、ローハン・リベット ジャーナリスト―戦争捕虜

ローハン・リベット (Rohan Deakin Rivett) は、オーストラリア・メルボルン市の名門中の名門家系の長男として一九一七年に生まれた。彼の父方の祖父は、現在のオーストラリア政府科学技術研究の中心組織であり世界的にも知られた CSIRO (Commonwealth Science and Industrial Research Organization 連邦科学技術研究機構) の実質的な創設者であり、有名な科学者だった。母方の祖父はオーストラリアの第二代首相アルフレッド・デーキンである。デーキン首相は、一九〇一年に独立国家となったオーストラリアという国の基本形を作った初期の大政治家だったと言われる。

ローハン・リベットはメルボルン大学卒業後、オックスフォード大学に進み、帰国後オーストラリアで新聞ジャーナリストと

して活躍し始める。三九年九月にフランス、イギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド（英連邦）がドイツに対して宣戦布告して第二次大戦が勃発し、ローハンは海外で戦うための兵役に志願する。（オーストラリアには徴兵制があったが、国外の戦場で戦うのは海外兵役を承知のうえで志願した者に限ることが国防法に規定されていた。徴兵されただけの兵員は、特に志願しなければ、海外の戦場に送られることは無かった。）

さて第二次大戦勃発の一九三九年から一年も経たない時点早くも四〇年五、六月、オランダ、フランスが、たった数週間戦っただけでドイツ軍に事実上降伏してしまった。多分ヒトラーですら、これほど素早く勝てるとは思ひもなかっただろう。その結果西ヨーロッパにおいて、英、加、豪、NZ、南アフリカなど英連邦はほぼ孤立してしまう。日本が真珠湾を奇襲攻撃してアメリカが参戦する四一年二月八日（太平洋戦争勃発）まで、イギリスおよび英連邦は、ヨーロッパで、地中海で、中東で、東アフリカで、ドイツ、イタリアとの孤独な戦いを続けたのだった。ロンドンもイギリス本土各地も何度も爆撃された。アメリカの参戦まで、イギリスと共に戦うのは、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、南アやインド植民地軍の少数勢力だけだった。ドイツがソ連に攻め込んだのは四一年六月であるが、独ソ戦初期、ドイツは圧倒的に優勢であるように見える。ソ連の崩壊は間近なのではないかとの観測は、当時は決して荒唐無稽なものではなかった。日本がアメリカを攻撃してルーズベルト大統領が対日宣戦布告したというニュースが入っ

てきたとき、劣勢かつ孤軍奮闘だったイギリスの首相チャーチルは、我々はこれで戦争に勝てるぞ!!と歓喜の声をあげたという。

さて太平洋戦争勃発以前から、アジアにも戦雲が迫ってくる。オーストラリアはマレー半島に兵力を送り、英連邦軍の一翼を担うことになった。そこで現地からオーストラリア政府にニュース、情報を送る必要が出てきた。ローハン・リベットは政府の命により軍役を離れ、シンガポールにあったラジオ局マラヤ放送協会の特派員ジャーナリスト兼ディレクターとして派遣されたのである。太平洋戦争が迫ってきていた。

日本軍は四一年二月八日（真珠湾攻撃の三十分前）、マレー半島のコタバル、パタニ、シンゴラの三地点に上陸して怒涛のごとく南下を開始、四二年一月三一日までにマレー半島最南端のジョホールバルを攻略し半島のほとんどを制圧下に置いた。二月初旬にシンガポールに上陸、ここでも英連邦軍を圧倒した。ついに二月一五日、第二五軍司令官山下奉文中将は、英領シンガポールのイギリス軍司令官パーシバル中将の降伏を受け入れた。このときマラヤからシンガポールに退却、集結していた英連邦軍兵士五万人以上（オーストラリア兵士は豪陸軍第八師団の二個旅団兵士のほとんど）が捕虜となった。降伏に前後して、多数のイギリスおよびオーストラリアなどの英連邦軍人、民間人がポートで海上に逃れた。難民の中にローハン・リベットの姿もあった。彼に乗った手漕ぎポートは約四週間かけてインドネシア（当時蘭領東インド）のジャワ島まで逃れていくが、三月上旬やっと流れ着いて上陸した際、一緒に逃げてい



アジア太平洋 タイ・ビルマ、ミッドウェイ、ガダルカナルなど

た尊大なイギリス人が現地村民を怒らせてしまい、彼らに通報され、ローハンは他の避難民と共に日本軍に捕まり、結局捕虜となってしまう。日本軍は三月一日ジャワ島に上陸しており、中旬にはオランダ植民地軍および英連邦軍を降伏させた。ここでも多数のオランダ軍、英軍、オーストラリア軍（二月のジャワ沖海戦で静められた豪巡洋艦パース乗組みの海軍兵士や中東から呼び戻されたオーストラリア陸軍第七師団所属の一個大隊）、アメリカ軍兵士（同じくジャワ沖海戦で沈められた米巡洋艦ヒューストン乗組みの米海軍兵）が捕虜となった。（捕虜数はオランダ九万、英豪米兵六千人）。

ローハン達はシンガポールに送り返され、チャンギ・ブリズンに収監され、そこから四二年一〇月初旬日本の輸送船でビルマのモールメインに送られる。彼らの行先はモールメインから南東六五キロにある前記のタンビザヤットであった。

日本軍は、ローハンたちがモールメインに送られる七か月前の四二年三月八日、ビルマのラングーンを占領、五月にはインド・ビルマの国境に近いカレワにおいて英印軍を撃破し、ビルマのほとんどを既に日本軍の制圧下に置いていたのである。その五月、ビルマとタイを結ぶ鉄道建設が開始された。ローハンたちは追加の捕虜労働力として五カ月遅れで送られたのだった。

タイメン鉄道建設の目的は、英領ビルマの占領を確実にすることだった。このために兵員、軍事物資、その他をタイやマラヤを通じて輸送するための鉄道を作らなければならない。ビルマ支配を固め、この方面から中国国民党の蒋介石政権を支援す

る援蔭ルートを断ち切り、外界と中国との接触経路を閉じ、またさらに、ビルマからインドに退却していったイギリス軍が將來反撃してきた場合にはこれを断固粉碎する。ビルマの守備を半永久化するためには、一日七〇〇〇トンの人員・物資を送ることの出来る鉄道を建設することだ!! (つまり、後のインパール作戦のような事態が起こった場合、陸上輸送経路は不可欠のものとなると考えられたのである。)

日本の占領下に入ったシンガポール、マラヤ、インドネシアとビルマを結ぶ輸送経路は、海上ルートもあるにはあった。ビルマの西岸とインド大陸との間のアンダマン海を通る経路である。マラッカ海峡を通ってアンダマン海、あるいはスダグ海峡を通してインド洋からアンダマン海というルートである。しかしビルマのアンダマン沿岸において、イギリス海軍の潜水艦は(イギリス軍がビルマから撤退した後も)出沒を続け、沿岸海域に入る日本の輸送船に被害が頻発し、日本軍にとって海上輸送は危険であると判断された。実際、ローハン・リベットは一五〇〇人の捕虜と一緒にアンダマン海を通ってモールメインに送られたのだが、彼の乗った輸送船に続いたもう一艘の日本の輸送船は、イギリス潜水艦の魚雷攻撃で撃沈され、一〇〇〇名を越すオランダ人、イギリス人捕虜がこの撃沈の犠牲になった。タイービルマ鉄道をめぐる状況はこのようだった。ビルマを固め、大東亜共栄圏を確立していく、そのためには大容量の陸上輸送路が必要と判断されたのである。

実はタイービルマ間鉄道敷設のアイディアは、戦前のイギリス植民地政庁にもあった。しかし、経路候補地帯の険しい地形、

熱帯のジャングルが広がる自然状況、雨季における大出水の危険などを考慮し、結局イギリスはこの案を断念したのだった。以前イギリスが放棄した案を、日本軍は実行することに決めた。極力短期の突貫工事でこれを完成させなければならない。工事は大きく二班に分かれた。一方はビルマのタンビザヤットから南のタイに向けて工事を開始し、他方はタイのバンボンから北のビルマに向けて工事を進める。「クワイ河の橋」は、この後者の一部を舞台にしたストーリーだったのだ。北からと南から進む工事は、タイ領のニーケ(Nyoke)で出会って完了することになった。もちろん工事においては、熱帯ジャングルのあらゆる風土病、つまりマラリア、 Dengue 熱、コレラ、赤痢、疫癘、熱帯性潰瘍(Tropical ulcer)、皮膚表面の潰瘍が肉へ、そして骨に達していく)などの疫病の蔓延と、地形の険しさからくる大事故などが予期された。両方が実際に起こった。

ローハン・リベットたちが送られたのは、南に向かう方のビルマ班だった。モールメインで下船した後、日本兵の監視のもと数珠つなぎにされた捕虜たちの長い列がとほとほ歩いていくのをドアやカーテンの陰から見ている仏教徒のビルマ人たちの中には、思わず駆け寄ってローハンたちに声をかけたり、食べ物を出そうとする者がいたという。ビルマ人たちの憐憫の情をローハンは後に記録することになる。捕虜たちはインドネシアやシンガポールでの数か月及んだ収容所生活の後に、ポロポロの軍服と食器やバケツなどの貧しい荷物を肩や背中に負って行進した。捕虜たちの中には、毛布も持っていない者もいた。また、毛布は持っていても、熱帯で暮らすために必需品

である蚊帳（カヤ）を持っている捕虜は極めて少なかった。熱帯で何度も蚊に刺されると、マラリアにかかる可能性が非常に高くなる。当時でもカヤ無しで熱帯生活は考えられない。日本軍がある程度カヤを供給したものと想像されるが、後にローハンは、カヤの不足がマラリア蔓延の原因になったことを回顧している。捕虜たちの行くてには、工事の危険と熱帯疫病が待っていた。



(タイメーン鉄道地図 タイ-ビルマ国境)

捕虜の中に、インドネシアでの収容所時代から隠し持っていたラジオを背中の中に何とか隠してビルマに持ち込んだ通信兵がいた。ラジオはたった一台だったようだが、捕虜の工兵や通信兵は、囚人視視の日本兵に隠れて、何とか工夫して受信機を使い続けることが出来たという。ラジオ受信機が捕虜囚人たちの中に有ったことの意味は非常に大きかったようだ。以下に少々述べるように、ローハンたちが鉄道建設に投入された一九四二年後半には、アジア・太平洋方面の戦争に於いても、またヨーロッパにおける戦争に於いても、連合軍（米軍および英連邦軍主力、四一年六月独ソ戦開始以後はロシアも連合軍に加わる）が盛り返し、特に太平洋方面において、戦局日本が明らかに劣勢に立たされるようになっていった。確かに、日本軍が劣勢になればなるほど日本からアジア方面への海上輸送が妨げられ、そのことは東南アジアの海上、陸上の物資輸送を混乱させ、縮小させた。従って、それだけ捕虜囚人へ食料、医薬品の供給が……絶望的なまでに……困難になっていくのだった。しかしたった一台のラジオを通じて、捕虜たちがイギリスのBBC放送を聴くことが出来、西ヨーロッパ、アジア、中東、ロシア（四二年八月〜四三年二月スターリングラード攻防戦でドイツ敗北）での戦局のニュースを知ることが出来たということとは、絶望的な状況にあったローハンたち捕虜の心に、希望の光を与え続けた。欧州、中東、太平洋方面において、戦争は自分たちの連合国軍に有利に展開しているようだという希望である。ラジオのニュースは密かに捕虜たち（その全部ではないにしても）の間に伝えられた。だから俺たちは、耐えて、耐えて、

耐え抜いて……生き延びるぞ、勇気を持って♪ 死なないぞ♪

### 三、四二―四三年の戦争の状況

ここで四二―四三年という太平洋戦争の趨勢を決定した期間の戦局状況を見ておく。戦局の推移はタイ―ビルマ鉄道にも、建設に駆り出されたローハンたち捕虜やアジア人ロームシヤの運命にも、間接的にはあれ重大な影響を与えたからである。

四一年二月の太平洋戦争開戦以来約七カ月にわたり、日本軍のアジア太平洋地域への展開は急激、かつ圧倒的であるかに見えた。香港、インドシナ半島、マレー半島、蘭領東インド(インドネシア)、ビルマ……そしてフィリッピンからはマッカーサーを敗走させ(四二年三月)、チモールや南太平洋までも次々に制圧していった。ラバウルのあるニューブリテン島(四二年一月)やニューギニアの一部を占領した。後々占領軍司令官として日本に君臨することになるマッカーサーは、フィリッピンにおいてアメリカ兵と現地兵の混成軍を率いていたのであるが、四一年クリスマススイブにマニラから撤退、バターン半島沖のコレドールにこもるも、ついに四二年三月一日、ここを脱出しオーストラリアに逃れ、そこからの対日反撃を目指すことになったのである。ここまでの日本軍の進出、展開は、まさに、破竹の勢いであつた。

しかし日本軍の「怒涛」の勢いは四二年五月頃までだった。その後急激に勢いを失っていった。四二年五月にサンゴ海の海

戦(米海軍と日本海軍の航空母艦艦載機どうしが攻撃し合う初めての海上戦闘)で、日本軍は太平洋戦争初めての敗退を喫する。そして六月のミッドウェイ海戦が日本海軍の大敗北に終わることによって、戦局の決定的な逆回転が始まったのだ。ミッドウェイは決定的だった。

ミッドウェイの戦いが起こったのは六月五―七日。日本海軍は半年前の真珠湾奇襲攻撃において、アメリカ太平洋艦隊の主力を壊滅させることが出来なかった。主力艦船が外洋に出ていたからである。大本営はもう一度、今度こそその主力を叩くべく、自らの主力機動(航空母艦)艦隊をハワイに向けて出動させた。しかし今回は、米海軍情報部の天才ロシユフォート中佐と彼のチームの徹夜の暗号解読努力によって、日本海軍がハワイに向けて出動しつつあり、日本艦隊はミッドウェイ諸島付近を通過する事が前もって察知されていた。アメリカ太平洋艦隊は、ミッドウェイ諸島付近で日本の大艦隊を待ち伏せる作戦に出た。今度はアメリカが奇襲したのだ。この戦闘で日本の連合艦隊は、主力中の主力であつた四航空母艦、赤城、加賀、蒼龍、飛龍を全て失う。

米軍艦載機の奇襲を察知した日本艦隊は、戦闘機を次々に母艦から発進させる。これを操縦していたのは、日本軍の中で最も熟練したパイロットたちだった。彼らは確かに米航空母艦を一艘撃沈させ、アメリカの戦闘機多数を撃墜したが、帰還すべき自軍の航空母艦がすべて沈められてしまい、帰るに帰れなくなった日本海軍の戦闘機は、結局ほとんどが海中に沈んでいった。また、母艦から発進するチャンスを逸した日本の戦闘機バ

イロツトたちも多数いた。彼らの多くも母艦そのものが沈没するに伴い、船と運命を共にした。ミッドウエイの戦いで、日本海軍は主力の航空母艦と、精銳中の精銳バイロツトの中核部を失ってしまった。物量的にアメリカ海軍と比べて決して圧倒的ではなかった日本海軍は、この敗北を境に海上での優位を失ったのである。損失を埋め合わせるだけの新艦船を作り出す力は日本には無かった。

一方のアメリカはこの頃になって軍需生産がフルスイング態勢になり、太平洋方面、西ヨーロッパ、地中海、中東に武器兵員を増強させ、スターリンのソ連軍への武器援助をもくろむほどの勢いを持つにいたつた。太平洋方面の米軍の優勢は、……即座に圧倒的になつたわけではないにせよ……四二年六月以降、着実に、次に急速に増大していった。

日本軍は四二年一月にラバウル（オーストラリアの国際連盟信託統治下にあるニューブリテン島の北東端にあつた行政中心城市）へちなみに同市は今から二四年前の一九九四年に起きたタブルブルとブルカン両火山の噴火の際の噴石、火山灰に埋もれてしまい今は無い）を占領し、三月にはニューギニアに進出、その後（ミッドウエイの敗北の後）七月にはソロモン諸島のガダルカナルに飛行場を建設し始める。八月になると同島にアメリカ海兵隊が上陸占領。これを撃退すべく日本軍は部隊を送り、ガダルカナルの戦いが始まる。日本軍は輸送船、爆撃機を送るものの、結局弾薬も食料も尽き、極めて多数の戦死者、餓死者を出し、四三年二月ここを撤退することになった。今に伝わる

ガダルカナルの惨劇、敗北である。

このように日本軍の捕虜ローハン・リベットが、タイメン鉄道建設に追い立てられていった四二年一〇月までには、太平洋方面における日本の制海権は消滅しつつあり、アメリカ海軍による日本から太平洋、東南アジア方面への兵員、物資輸送に対する攻撃が着実に強まろうとしていた。

この大きな変化に加え、インドシナ半島やマラヤ半島などでは、現地の物流ネットワークに、日本軍政にとって相当に都合の悪い状況が起ころうとしていたようだ。これは次のような事情によるらしい。戦争勃発まで、この地域の食糧などの流通には、現地の商人たちが昔から発達、維持させてきた物流ネットワークが大きな役割を果たしていた。そのネットワークを動かすにあたって、各地の商人の他に華僑の活動は極めて重要だった。戦争が始まり、日本軍が東南アジアを制圧した後、当たり前前のことだが、日本軍政はこの物流ネットワークに深く介入していった。そのことは現地人や華僑たちに様々な反応、摩擦を巻き起こすことになった。このことが東南アジアの物流ネットワークの機能に相当な影響を及ぼしていったと言われる。

#### 四、捕虜たちと鉄道工事

さてこのようなか、ローハンたちは日本軍の囚人監視体制のもとに作業に駆り立てられていった。だいたい五キロごとに工区が設定され、その工事が終了すると次の工区に移って行くということの繰り返しだった。工事の道具はもちろん手作業用

のものばかりで、ジャングルの木を伐り倒すための斧、ノコギリ。シャベル、ツルハシ、土や石を運ぶモッコ。岩は鉄製の大きな槌をハンマーでたたいて割った。ダイナマイトなどはほとんど使われなかったという。来る日も来る日も早朝から夜遅くまで厳しい監視の下で作業が続けられた。鉄材も乏しく、河をまたぐ鉄道を通すときは、鉄橋ではなく木材で橋を作った。

寝泊まりするところは、竹材を組み合わせた掘っ建て小屋の長屋だった。その長屋が何列も連なり、銃と刀を手にした看守が常に鋭い目を光らせていた。看守は日本人兵だけでなく、朝鮮人兵士もいた。寝る時はむき出しの土やあるいは土に草木を敷いたり、その上に毛布（毛布の無いものもいた）を広げて寝たり、あるいは捕虜でもさすがに将校の地位にある者は、竹材で作られたベッドのようなものの上で寝たという。ローハン・リベットはジャーナリストとはいえ将校の扱いを受けていた。

捕虜とはいえ、捕えられた側にも軍隊の階級組織、命令系統が持ち込まれており、ローハン・リベットが属した二千人を超える捕虜集団のトップは、オーストラリア軍バレーレイ准将だった。ローハンはバレーレイ准将が、いわゆる戦争に関する「ジュネーブ条約」を無視する日本側のトップの「無理難題」に対して、犠牲を少しでも少なくするように懸命の努力をしてくれたのが有難かったと感謝している。たとえば、日本側は、捕虜がタンビザヤットの作業現場に到着した時点で、ある上級将校に対し、「捕虜は一人も脱走しないという誓約書に、全員を代表して署名せよ」と命令する。将校がこれを拒否すると、彼は即座に穴を掘った牢に入れられてしまう。数日たってその

ことを知らされたバレーレイ准将は、将校と共に牢に入り、何日か彼と話し合い、とにかく自分が署名して……つまり脱走者が出たら自分が責任を取ることを約束して……銃殺刑に処せられようとしていた将校が牢から出るように計らった。この将校だけでなく、次には同じことを強要されることになる他の将校たちの命も救ったのだ。それでもやはり被害は甚大だったのだが。

捕虜たちは作業ノルマを与えられ、モッコで一日一人当たり一立方メートルの土を運ぶこと、そして月日が過ぎていくにつれ、ノルマが二立方メートルに増やされていった。爆薬もほんの少量しか使わない作業だったので、岩石の地帯を切り開くときは、鉄のツチを岩に突き立ててそれをハンマーでたたき、少しずつ砕いて掘り進まなければならなかった。ローハンたちはビルマ側での作業だったのだが、タイ側で作業していたオーストラリア人捕虜のグループも、ある工区で、岩場の丘を切り開かなければならなかった。夜を徹した作業となり、カンテラや焚火の灯りの下で不休の強制が何日も続いた。この作業の犠牲者は多かった。ここは捕虜たちの間でヘルファイア Hell Fire と呼ばれるようになり、あの時の灯りが地獄の炎のように見えたのだ。 (戦後四〇数年たった時点で、二、元捕虜のオーストラリア人兵士が定期的にヘルファイアを訪れ、昔をしのび、死んでいった戦友の霊を慰めた。)

モッコの作業ノルマは、最初の頃は何とかこなせたよかったが、ノルマ増後、しかも雨季になると、どんどん痩せていく身体には、それは困難を極めたものになっていった。土が水をたつぷ



(80年代の慰霊訪問時の Hell Fire。オーストラリア国旗が見える。)

り含んでいたからである。ビルマは五月頃から雨季が始まり、それが数カ月続く。しかも捕虜たちの体力はドンドン衰えていた。ローハンは、衰弱して作業中に倒れた仲間を、衰弱の程度がより重くない仲間が助けて、倒れた者の分まで運んでやる……そして自分も倒れていくオーストラリア人捕虜たちのことを記録している。

体力の衰えの理由は様々で、それが重なったのだ。まず食糧不足である。四二年末の頃には、食料の調達が思わしくなくなってくる。ましてや捕虜に配る食料となると、日本兵士や軍属の後回しとされた。ローハンは、来る日も来る日もゆるいお粥と僅かな野菜、タンパク質がほとんどない食事が繰り返し返されたことを記している。以前は八〇キロもそれ以上もあった体重が、捕虜生活が長引くにつれ、六〇、五〇キロ、それ以下に減ってゆく。作業はより厳しくなっても、体力はより少なくなっていく。作業にはタイ側でもビルマ側でも少数ではあれ水牛や象が使われた。水牛や象ですら、満足なエサと休養を与えられず、次第に痩せ衰えて死んでいったという。食料のことは後に短くもう一度戻ってくる。

熱帯のビルマとはいえ、一月になると急に気温が下がりそれが数カ月続いた。寒さから身を守る衣類を持たない捕虜たちには、夜の寒さは格別だったようだ。みんな身を寄せ合って寝るものの、寒さによってこの比較的初期の段階から、体力は衰えた。

体力の衰えのもう一つの理由は、病気である。そこは熱帯の

ジャングル、恐ろしい風土病の巢窟だった。しかも捕虜収容キャンプの不潔さ。カヤが不足していたことは既に触れた。マリリアが広がり、高熱、ケイレンで倒れ、死んでいく者が多かった。コレラ、赤痢、その他の激しい下痢性の伝染病は、不潔な住環境の中ではすぐに広がる。また、これも既に述べた熱帯性潰瘍。これに罹ると皮膚に広く赤い斑点が広がり、次に肉の部分が腐ってゆき、骨が露出してくる。命を助けるためにはこうなる前に患部を切り取らなければならない。手術用のメスも絶対的に不足、麻酔薬もない……。それをどう処置したかは……あまり想像したくない。

ローハンによると、日本の軍医がいるにはいたが、彼らの捕虜に関する任務は、実際は捕虜が作業に出られる体調であるか、あるいは弱すぎて使いものにならないかを判断することだったというニュアンスのことが書かれている。

捕虜の中には、イギリス、オーストラリア、オランダ軍の軍医が少数ではあれ含まれていた。オーストラリア人軍医の中では、ウィリアム・ダンロップ William Dunlop が有名である。彼はウェアリー・ダンロップ Weary Dunlop つまり、オツカレ・ダンロップという愛称で知られ、オーストラリアでは、特にラグビーの愛好者（オーストラリア人にとってのラグビーは日本人にとっての野球）の間では今でもよく知られた伝説的な人物である。ニメートル近い堂々たる体格。彼はメルボルン大学医学部学生だった頃からオーストラリア代表チームの花形ラグビープレイヤーだった。全国的に知られたスポーツマンだったのだ。彼も三九年に志願して軍医となり、オーストラリア第

七師団と共にエジプト、ギリシヤ、リビア（ロンメルドイツ戦車軍団と戦う）で前線に立つ。その後、ジャワに移動したところで捕虜となった。なぜオツカレ・ダンロップなのか？彼の苗字であるダンロップは車のタイヤのブランドネームと同じである。イギリス英語のタイヤ *tire* は *tyre* 「疲れさせる」につながり、*tyre* は「疲れている」の *weary* につながる。そこで Weary Dunlop という愛称で呼ばれるようになった。戦後彼は以前にもまして国民的英雄となる。メルボルンにはウェアリー・ダンロップクラブというラグビーのプロチームがあるくらいである。

彼はタイメン鉄道で捕虜たちのために懸命の治療にあたる。薬も圧倒的に不足、基本的な医療器具もない、包帯すら無い中で、捕虜たちに極力衛生状態を保つにはどうしたらよいか、病気に倒れた仲間の介護の仕方を教え、手製の医療器具を作る（スプーンを研いで手術用のナイフにするとか）。やむを得ず相当に手荒な方法での手術も行う。戦争が終わって解放された捕虜の中には、手や足を失ったもの、ケガや栄養失調で視力を失ったものが多数いたが、ドクター・オツカレ・ダンロップのおかげで何とか命が助かった者が沢山いた。

捕虜に対する看守の中には、ことさら残酷さを発揮するサディストもいたようだし、逆に捕虜に対して同情心を持ち、他の日本兵に隠れて親切にしてくれたり、見て見ぬふりをしてくれる日本兵や朝鮮人兵士の看守もいたという。とはいえ、捕虜に対することさらなる虐待が彼らの体力衰退に拍車をかけたのも、犠牲者数が増大したことの原因になったようだ。ローハン

は、軽微なルール違反でも穴の牢に長期に渡りぶち込まれたり、コレラや赤痢患者が死の床に放置されているところに、気に入らない捕虜を閉じ込めたりという何とも気の滅入る事件を記録している。

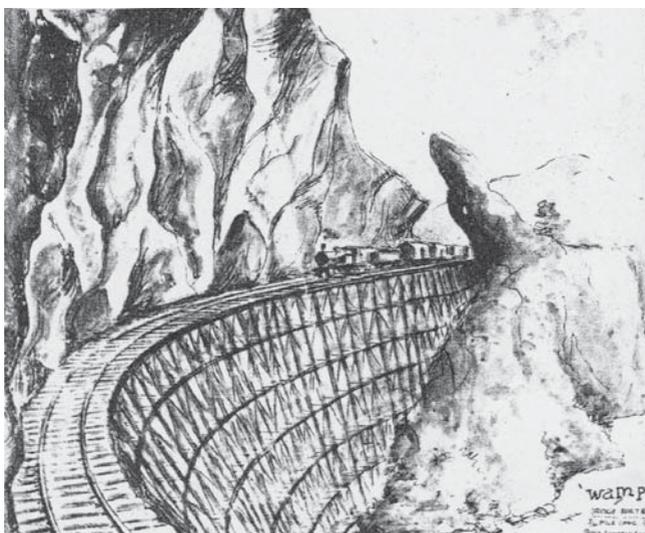
医療品その他についてもローハンの記録がある。アメリカもイギリスもオーストラリアも、国際赤十字（と中立国）を通じて医薬品、食料、タバコ、衣類、家族からの手紙などを日本側に送ってきていた。しかしそれらは大部分がどこかに隠匿されるか、あるいは日本軍に横領されるかで、捕虜たちの手にはほとんど届かなかつた。捕虜たちがそれらの一部を受け取り始めるのは四三年末からのことであつた。ローハンは妻が必死の思いで出した手紙を、一年以上も経つてからたった一通だけ受け取ることが出来た。四五年八月一日終戦を迎えた時、それまで虐待する側だった日本人将校が、捕虜たちに対し、「赤十字からの物資を受け取ったという書類にサインしてくれ」と腰を低くして頼んできたという。捕虜たちの反応は……まあ推して知るべしである。

食料に関し再び短く触れておく。実は捕虜になつた将校たちは、四二年一二月より日本軍から、それぞれのランクに応じて俸給を受け取ることになつた。つまり捕虜の中尉は日本軍中尉と同額、大尉は日本の大尉と同額、少佐は……など。捕虜たちは円で受け取るのではなく現地通貨で受け取つた。パレイイ准将は将校たちと相談の後、将校団への俸給の九割以上をプールすることにし、その資金で（料理・材料調達を受け持つ任務の

捕虜たちが）卵や肉、魚、果物などを買い、僅かでも捕虜たちの体力維持に役立てようとした。将校以外の捕虜たちに給料が有つたのか否かは私には不明であるが、ローハンは、兵士たちなどを記録している。見つかつて銃殺されたことも。規則違反脱走、その疑いなどで、処刑された捕虜は多かつた。

また、ジャングルで捕まえたヘビ、カエル、川魚、トカゲなどが彼らの貴重なタンパク源だつた。ローハンの記録に、一八フィート以上もある大蛇を捕まえて、ステーキやシチューにしてみんなで食べたことが懐かしいエピソードとしてあげられている。

いずれにせよ、苛酷な状況の下、多数の犠牲者を出しながら作業は続き、徐々に線路は伸びていった。雨季に入つても作業は続き、転落、落石などでの死傷事故が頻発した。四三年が進むとともに、病人はますます増え、犠牲者も増えていった。それでもついに四三年一〇月、ビルマ側とタイ側の工事がタイ領のニーケ(Nyoke)で出会い、工事は完成した。一一月に完成式を行う。ここでビルマ側の責任者、ナガトモ大佐が完成を喜び、犠牲者を悼む演説をした。完成後しばらく経つてから、捕虜たちは徐々にタイ側に移動させられ、カンチャナブリやノンブラドックなどに収容された。新たな収容施設では、病院があり、さすがにジャングルの竹材掘つ立て小屋よりもましな治療が受けられるようになったという。捕虜たちは次に収容所を出て、タイのバンコク付近やシンガポールに移送されていった。



(レオ・ローリングズが描いたタイ領内ワンポオの鉄道橋)

ローハン・リベットはバンコク組だった。

シンガポール建国の父といわれるリークアンユーは、一九四四年には二二歳だった。彼は日本軍政下のシンガポールで事務員や接着剤製造など様々な事をして生き延びていたのだが、四四年半ば、シンガポールの中心付近に突然骨と皮ばかりにやせ、ဝါဒိဗို (フンドシのこと) だけをつけた西洋人の捕虜が多数出現したことに驚いたことを、回想録に記録している。この幽霊のような元兵士達こそ、タイメン鉄道工事の生き残り、タイのカンチャナブリやノンプラドックなどからシンガポールに送り返されてきた捕虜たちだった。尻の骨が浮き出ているのを見て、リークアンユー青年はびつくりしたのだった。

ローハン・リベットは、タイメン鉄道に使役された連合軍捕虜に関して戦後に日本が公式に発表した数字を引用し、四四年一月までの段階でどれだけだけの連合軍捕虜がいて、そのうちどれだけが死んでいったかを記録している。もっとも、彼はこの公式数字は捕虜の数で二万人以上、死者の数で四千人以上実際よりも足りない」と批判している。いずれにせよ日本の公式数字は、イギリス人捕虜総数二三、八七一人でそのうち死者が三、三八三人、オーストラリア人捕虜総数八、四五八人死者一、二八四人、アメリカ人捕虜総数六六八人死者二七人、オランダ人捕虜総数一七、三九一人死者一、四九〇人。

ローハンは、死者数について日本の統計にはオーストラリア人が八〇〇人以上、イギリス人が三、二〇〇人以上足りないじゃないかと言っているのである。いずれにせよ、四四年一月以降

も体力消耗や重病で、多数の死者が出た。オーストラリアの公式記録では、最終的に日本の統計よりも一、六〇〇人多く、死者二、八一五人となっている。

## 五、タイメン鉄道のその後

既に述べたように、四二年後半以降第二次大戦の趨勢は、世界中で明らかに連合軍側が有利になっていった。太平洋方面でミッドウェイ海戦。北アフリカでは、四二年一〇月のエジプトのエル・アラメインの戦いでモンテゴメリー将軍率いる英連邦軍が、ロンメル将軍のドイツ戦車軍団を敗走させ、決定的な転換を迎えた。ロシアではスターリングラード攻防戦で四二年二月ドイツ軍敗北、後退が始まる。アメリカ、イギリスの軍需工場は航空機、戦車、空母、戦艦の生産を加速させた。四三年までにはインドにおけるイギリスの航空兵力も（海軍力はもちろん）着実に増強されていった。

インドにいた英空軍爆撃機は、四三年までにはビルマの日本軍施設、基地を爆撃し始める。タイメン鉄道も当然攻撃の対象になった。雨季が明けるところになると、一応完成していた鉄道が爆撃され始め、捕虜を駆り立ててそれを修復すると、またそれが爆撃される。日本戦闘機の迎撃は徐々に手薄になった。捕虜たちが収容されていた竹材の掘り立て小屋も爆撃された。パレーイ准将たちが、友軍機の爆撃を避けるために掘り建て小屋の屋根に赤十字のマークを書かせてくれと懇願したのだが、受け入れられなかった。ただしこの頃になると、タイでもビル

マでも、連合軍側は現地人のスパイ獲得に着手、成功、スパイたちが捕虜がいる場所を通報し、イギリス爆撃機による捕虜の被害は減少した。

映画の『戦場にかける橋』では、アメリカ人捕虜が脱走に成功し、ゲリラとしてクワイ河に戻り、クライマックスでは橋が爆破されるのだが、鉄道に対する現実の破壊活動は、インド領から飛来した爆撃機による爆弾投下が有効だったようだ。一応完成したタイメン鉄道だったが、不通状態が頻発、予定の一日当たり輸送量七〇〇トンは、せいぜい一〇〇〇トンをこえる程度になってしまい、しかも運ぶべき物資そのものの不足が深刻になっていった。爆撃は続き、結局タイとビルマの間の輸送は、尻すばみになっていった。

ビルマでインパール作戦が始まるのは四四年三月である。インパールに本拠を置くイギリス軍を叩き、さらにアッサム地方まで進出してイギリスの再起を不可能にし、援蒋ルート破壊を確実にする……などの目的を持った作戦だった。そして、まさにこのような作戦のためにこそ、タイメン鉄道が作られたはずだったのだが。結局インパール作戦において、タイメン鉄道はほとんど役に立たなかった。食料も弾薬も尽きた日本軍が、雨季の中、インパール付近から撤退、その途中であまりに多数の日本兵が餓死、病衰弱死、戦死した。その退路は後に「白骨街道」と呼ばれるようになったのであった。

四五年八月戦争が終わった後、タイメン鉄道はどうなったの

であろうか。鉄道路線のうちビルマ側はイギリスによって線路が撤去された。タイ側ではノンプラドック・バンポン・ナムトク間の線路が生き延びることになった。現在でも使用されている。ナムトク以遠でビルマに近い方は、線路が撤去された。前述のヘルファイア（地獄の灯り）の線路も撤去された。

## 六、再び元捕虜ローハン・リベットのこと

終戦をバンコク近郊の収容所で迎えたローハンは、日本軍の捕虜を解放しに来たオーストラリア軍救助隊に会い、そこからインドのカルカッタに輸送される。カルカッタには元オーストラリア外相のサー・ケイシーがオーストラリア代表として駐在していた。サー・ケイシーは、豪第二代首相デューキンの孫の瘦せ衰えたローハンを公邸に迎え歓待する。ローハンは次の日に空軍輸送機でシंगाポール、ダーウインを経由して妻と両親の待つメルボルンに帰還した。

帰還後しばらくして、彼はあので獄を生き抜いた英雄としてオーストラリアのジャーナリズム界に復帰する。彼を迎えたのは当時からオーストラリアの新聞界、放送界の有力者だったキース・マードックだった。つまり現在、オーストラリアは勿論のこと、アメリカジャーナリズム界で知る人ぞ知る大物フォックスTV所有者であり、イギリスのロンドン・タイムズをも支配するあのルパート・マードックの父親である。キース・マードックはローハンを重用した。ローハンは新聞コラムで、ラジオの解説番組で、後にはテレビで大活躍するようになった。

た。ある原住民アボリジナルがおかしたとされた殺人事件の裁判、スチユアート・ケースでの活動は今でもよく知られている。……ローハンは自説を曲げないストリートなジャーナリストだった。キース・マードックが引退し、超保守的な息子のルパート・マードックがニューズ・コーポレーションの経営を握るようになると、ローハン・リベットとルパート・マードックは対立し、ついにローハンは人々の大きな驚きの中、このメジャーな舞台から転身し、別のメジャーな世界に入っていた。

しかし三年半の捕虜生活は、彼の肉体にも深い後遺症を残していた。これは数多くの元捕虜たちが背負われた運命でもあった。ローハンは戦後を通じて精一杯の活躍を続けたものの、一九七七年六〇歳で死んでいった。

ところで、私になぜローハン・リベットのことを書いたのかを記しておきたい。そのため、私の個人的なある体験を説明させていたたく。私はオーストラリアのシドニーにあるニューサウスウェールズ大学（UNSW）大学院を七六年に終了、他の大学で教えた後、UNSWに戻り、そこで約一〇年教えた。UNSW 商学部上級講師のドクター・ケネス・リベットに、大学院時代は学生として、教員になった後は同僚として親しくしてもらった。ケネス・リベット……ケン・リベットはあの元捕虜のローハン・リベットの弟だったのだが、私は当時、ローハンのことも、ケンがメルボルンの名門家系の出身であることも全く知らなかった。ケンはそういうことを一切私に話さなかった。ケンは私よりも二五歳以上も年上だった。（オーストラリア

アの大学ではあの当時、学生も教員も対等で……親しみをこめて……お互い名前と呼び捨てだった。多分今もそうだろう。) 口数少なくバリトンの深い声でゆっくり話し、大学内の昇進にも全く無関心だった。生涯独身。学生に対し実に真剣に接する教員だった。特にアジアからの留学生に対するケンの親切はいつも驚くほど本気だった。七〇年代、東南アジアは貧しかった。留学生の多くは、豪政府丸抱えの奨学金があるとはいえ貧しく勉強していた。ケンは時には自分の給料を割いても留学生を助けることがあった。生涯賃貸アパート暮らしだった。

一九七五年ベトナム戦争が終了後暫くして、ベトナム難民がオーストラリアにも漂着するようになった。同時にカンボジアやラオスからも。いつもは静かなケン・リベットは、難民支援の組織を大学でも大学外でも立ち上げ、奮闘した。それが二〇年以上も休まず続いた。私も少しだけそのお手伝いをしたことがある。インドシナ難民のオーストラリアにおける再出発は、豪政府やケンたちのような民間団体の活動の結果、九〇年代までには、「非常に成功、難民たちもオーストラリアに大きく貢献している」という評価が定着するまでになった。私は八〇年代後半に帰国、八八年四月から名城で働き始めた。

二〇〇〇年を過ぎたころから、私は太平洋戦争とは、オーストラリアにとつてどのような事だったのかについて読み始めた。UNSWは、私のような日本人留学生達にも丸抱えの奨学金を出してくれたし、私は人種差別にもほとんど遭わなかった。自分の指導教授のマレー・ケンプ先生や、ケンなど本当に親しい友人たちもいた。しかし、オーストラリアと日本はむごい戦

いをした過去がある。戦った相手国から見た戦争はどのような戦争だったのか？ 戦いはどのように展開したのか？ この疑問がオーストラリアの社会、歴史にとつて、第二次世界大戦、太平洋戦争とは何だったのかを読み始めるきっかけだった。

そのリサーチの過程で、ローハン・リベットの *Behind Bamboo* を読んだ。私の専門は経済理論であり、歴史は素人である。オーストラリアの戦史の資料収集にあたって、元同僚の親友で経済史を専門とするバリー・ダイスターにアドバイスをもらうことが多かった。今から五年前の夏休み、シドニーでバリーと話しているとき、「ところでヒデオ、お前ケンが死んだのを知っているだろ」と訊かれた。「いや知らなかった、ケンも九〇歳くらいだったろ」と私。バリーは「アパートで机に突っ伏して死んでいたのを何日後かに管理人のオバちゃんに見えられたんだよ」と教えてくれ、それからケンについての話が続いた。その中でバリーは、私の心臓が飛び出すようなことを言いはじめた。「彼の家系はすごい歴史的人物ばかりだったよなあ、ディーキン首相だろ、ローハン・リベットだろ……」これを聞いて「私は思わず『What? What did you say?』と叫んでしまった。『あのローハン・リベットがケンの兄弟だって!! Behind Bamboo のかよ!! オーマイゴッド!!』バリーは、私の驚きように驚いてしまった。『だってヒデオ、お前知らなかったの?』お前はケンと親しかったじゃないか。」

私はローハンの本はバリーに教えられたのではなく、自分で見つけて読んだのだ。しかし、自分が親しくしてもらったケン・リベットとローハンが兄弟だったとは夢にも思わなかつ

た。リベットというファミリーネームはそれほど珍しくはないし、UNSWでは、他の同僚達とも家系図の話などとしたことがなかった。そうだったのか……ケンハンの弟だったのか。ローハンが日本軍の手でどんな虐待を受けたか、ケンハンはもちろん十二分に承知していた。そのことを日本人である私に一言もいわなかった。その時突然、私はケンの心がどれほど深く、広く、温かだったのかを思い知らされた。このときの驚き。この驚きを一生忘れることはないだろう。これがローハンのことを書いた理由である。世界には偉大な人々がいるものである。本当にマイッタ。